

高原の縄文王国収穫祭

富士眉月弧文化圏

私が勤める職場のすぐ近くに鑄物師屋遺跡（山梨県南アルプス市）という縄文遺跡があります。人体が描かれた土器と妊娠中の女性を表現したような土偶が出土したことで有名になりました。



有孔鏢付き土器「ピース」

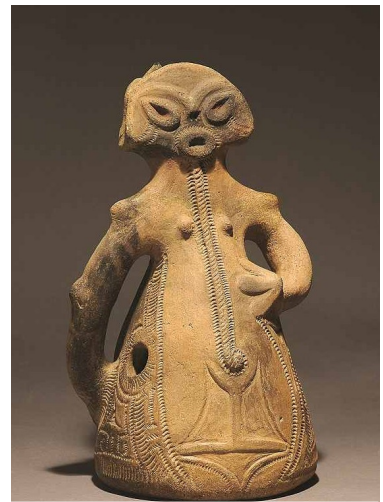
人体文様が付いた土器の愛称は

三本指のピースサインを出しているように見えることから「ピース」。

土偶そのものが土器の文様として描かれているというところは画期的なことだそうです。

大きなお腹や反った腰、大切そうにお腹に置いた左手、妊娠時にできる正中線やおへその様子など妊娠中の女性を思わせる土偶は「子宝のラヴィー」と名付けられました。

これら二つの出土品は、平成七年に国の重要文化財に指定されています。また国内はもとよりローマ市立博物館、マレーシア国立博物館、韓国国立中央博物館やモン



中空土偶「ラヴィー」

トリオール博物館に、また大英博物館には二回も貸し出され展示されています。また図鑑や教科書の表紙を飾るなど、まさに「日本の縄文文化の顔」として広く海外でも活躍している貴重な土器・土偶なのです。

二人合わせて「ラヴィー&ピース」、つまり愛と平和です。二人のお姿を眺めるたびに、いろいろな想像が湧き出てきて、何回眺めても飽きません。

縄文時代が面白いのは、面倒な

文献が存在せず、出土した「モノ」から想像力を働かせて推理するしかないことです。私の周辺には日本有数の縄文遺跡がたくさんあります。推理を働かせるには博物館に展示されている出土品をこまめにチェックすることはもちろん、出土した遺跡を訪ねて当時の生活ぶりに思いをはせることも重要です。

今まで何年にもわたって世界の未開地域への「空間の旅」を楽しんできましたが、これからは縄文時代という過去への「時間の旅」も楽しめそうです。気がついてみれば、縄文時代以外の日本の歴史を学ぼうとするとこんなわけにはいきません。弥生時代以降の日本文化の中心は関西方面を中心に展開されます。大きな古墳が集中す

るのは大和、河内などですし、その後の飛鳥、奈良、平安と政治の中心は常に関西地方でした。

しかし縄文時代の文化の爛熟期である中期に限って言えば、甲府盆地や八ヶ岳山麓は日本（当時日本という国はなかったが）の中心だったといっても過言ではありません。山梨や長野の博物館は共同で、「縄文王国」というキャッチフレーズを作り、遺跡のアピールを図っています。

縄文時代は身分の分化がまだ発生しておらず、王様もいなかったと考えられていますから「王国」とはいかなるものでしょう。私は「縄文民国」の方がよさそうに思えます。

「縄文王国」は愛嬌でしょうが、この地を「富士眉月弧文化圏」と

呼ぼうという壮大な構想を真剣に提唱している研究者たちもいます。長野県富士見町にある井戸尻考古館に依る研究者たちは、縄文中期に中部高地から西南関東にかけて同じような器形とデザインを持つ土器を作り、同じような石器で雑穀農耕を営み、世界観と神話を共有していた文化圏があったと考え、これに「富士眉月弧文化圏」と名付けたのです。

メソポタミア文明の発祥の地を「肥沃な三日月地帯・Taurus-Caucasus」と名付けたJ・H・ブレステッドの向こうを張ったつもりでしょうが、研究の進歩には、少し乱暴でも大胆に仮説を立てるといふ作業が必要です。

眉月とは細い月のことをいいますが、甲府盆地を中心として東と



西に両の眉を連ねたような細長いMの字のような地帯がピンクの線で囲われています。そしてこの地図によると、富士山と北岳が両目に当たり、富士川が鼻筋に当たります。

もろこしの収穫

そんなことで、井戸尻考古館にはいつかは行きたいと思っていたのですが、インターネットで検索していると、井戸尻遺跡公園で「高原の縄文王国収穫祭」というイベントを開催するという情報に行き当たりました。富士見町は山梨との境にある長野県の町で、中央高速道路を使えばわが家から一時間もかかりません。

十月の土曜日の朝、さわやかな秋空が広がるのを見届け、朝食も早々、勇躍現地へ出かけることにしました。

次ページの写真はハヶ岳のほぼ真東にある入笠山(一九五五m)の山頂から私が数年前に撮ったハヶ岳です。甲府盆地は右側、諏訪湖

が左側で、谷の一番低いところを釜無川が流れ、それと並行して甲州街道が走っています。

ハヶ岳は山梨から見るとピークは五つか六つしか見られませんが、これは南北に連なる連峰を南から





富士見町からの富士

見ているためです。連峰を横から見ると、確かに八つのピークが確認できて、山名の由来が分かります。

井戸尻遺跡は編笠山の山裾の標高八百メートルあたりに位置します。その位の標高は八ヶ岳の伏流水が湧き水となって現れる地帯で

す。縄文の人たちは湧き水を利用するために、その近くに集落を作ったに違いありません。辺りは日当たりのよい落葉樹の雑木林が広がっていたことでしょう。

井戸尻遺跡は中央高速道路の小淵沢インターチェンジから車で十五分ほどの距離です。遺跡公園の会場には大きなテントが張られ、すでにたくさんの方が集まっています。富士見町という町名に違わず、南にはきれいな富士山が顔のぞかせています。

会場には地元の方々が工夫を凝らした模擬店が出店され、お祭りムードが高まっています。

鮎の塩焼きや縄文おにぎり、ドングリのクッキーなども魅力があります。とりあえず「収穫祭」なので、何かを収穫するはずで



考古学者・小林公明さん

それはどこかと思渡すと、賑やかな会場から少し離れた畑の中にくねんと立っているひとりの親爺を見つけました。草丈三メートルもあるモロコシ（高きび）の畑です。

モロコシはアフリカやインドで栽培されているのを見たことがあります。日本でも昔は五穀の一種として高きびという名前で栽培されていましたが、山梨あたりでは最近とんと見かけません。

親爺の足元には箱に入った石器がいくつか並べてあります。

「こっちへこうし。その箱の中で手になじみそうな石器を取ってくりよう。それを使って収穫するだよ」

親爺はいまどき山梨でも珍しい生粋の甲州弁です。

「これ、本ものの石器ですか？」

「いやいや、これはオレが河原で拾った石で造ったずら。石包丁ちゆうもんだよ」

手に取ってみると刃の部分はかなり鋭利で、これなら草の茎ぐら

いなら切れそうです。親爺の指導で早速、収穫に挑戦してみました。モロコシは稲刈りのように根元から刈り取るのではなく、穂の部分のすぐ下のところから刈り取ります。現在のコメは品種改良が進んでいきますから、一斉に穂が熟しますが、縄文時代ではそうはいき



石包丁

ません。穂摘みは黄色く成熟した穂を選んで摘みとり、青い穂はしばらく残すためです。

石包丁の使い方にはちょっとしたコツがあります。刃の部分を茎に押しつけながら、手前から向こうに刃を滑らせるのです。

指導する親爺さんは、縄文時代の作業を見てきたようなことを言いますが、東アジアなどで今でも行われている穂摘みからの類推です。日本でも平安時代ごろまでは稲の収穫は穂摘みだといわれています。

そういえば山梨県の南アルプス山中に奈良田という、つい最近まで焼き畑をやっていた部落がありますが、ここの農具を集めた資料館で穂摘み用の農具を見たことを思い出しました。

考古館の前館長

ところでこの収穫の指導をしてくれた親爺さんは、なんとかつて井戸尻考古館の館長を務めていた小林公明さんだったのです。そしてかの「富士眉月弧文化圏」を提唱した当人でもあったのだから驚きです。もちろん縄文の研究者として高名な方であることはいまでもありません。考古館で買い求めた「甦る高原の縄文王国」という講演録集の中で「富士眉月弧文化圏」に関するこんな発言があります。

「一九八八年頃、まあ、そう呼んだらどうか、ということをお願いしたんですけど、そうするとですね、甲府盆地は、この眉間に当たるわけです。で、左の眉の距

離と右の眉の距離は、ちょうど等しい距離なんです。地理的中心は明らかに甲府盆地。では文化の中心は何処かというところ、これも甲府盆地」

こんなことを言われると、甲府盆地に住む者として、なんとなく嬉しくなります。

「これはお見それいたしました。その道の大家であれば、ぶしつけですが縄文の農耕について教えてください。縄文時代は狩猟・採集の時代で、農耕の始まりは弥生時代からといわれていますが、この考古館の研究者たちは藤森栄一さん以来、縄文農耕論を唱えていますね。モロコシのような雑穀が栽培されていたという前提で、この収穫体験をやっているのでしょうか」



土器づくり

「井戸尻から出てくる石器を見ると、土起こしをするためや草取りに使う石鍬や石斧がたくさん出てくるんだけど、狩猟に使うやじりなどはあまり出てこないよ。戦後間もなく、地元出身の藤森栄一さ

んちゅう考古学者が「縄文農耕論」を唱えたんだけど、当時の学会では猛反発を受けちもうだ。ふんだけん井戸尻考古館はその後、縄文農耕を立証するために研究を重ねてきて、今ではかなりの自信を持つてるずら」

「民博の館長だった民俗学の佐々木高明さんも弥生の稲作に先立って、雑穀やイモなどの焼き畑農耕があったという主張をしていますね」

「おらんとうはそれよりさらに踏み込んで、常畑での集約的な農



石斧で木を切る

業があったと考えてるずら。考古館に寄って石器や土器をよく見ていっておくんたて」

「もうひとつ、この石包丁はどうやって作るんですか」

「河原へ行けば平べったい石があるら。手のひらより少し大きいぐらいのやつを大きな石に叩きつけると、板をひっぺがすような向きに二つに割れて、一方が刃物状になる。それを少し磨いてやりやあいいずら」

「ほお、どんな種類の石を使うんですか」

「小学生に石器作りの講習会をやったことがあるけど、試してみろし。何回かやってみればコツが分かってくるずら」

新しいお客が来たため、質問は打ち切らざるを得なかったが小林



石皿利用のどんぐりの製粉

前館長さんは、ど素人の私に対し終始にこやかに答えてくれた。

フィールドワークを得意とする在野の研究者らしく、とつとつと甲州弁でしゃべられる姿は、とても好感が持てた。短い時間だったが、野球少年が長嶋選手の指導を偶然受けたみたいな感激で、私の縄文熱はさらに高まってきました。

会場ではこの他に、石皿を使ったどんぐりの製粉、石斧を使った木の切断、土器の野焼きなどが行われていました。

私も石斧で木を切る作業をやってみましたが、二、三回斧を振っただけで手が痛くなり、早々に退散しました。青森県の三内丸山遺跡では直径一メートルほどのあるクリの木が建築材として使われていたといいますが、相当な根気と体力がいることでしょう。

ちなみに石斧を振るう私の服装は縄文時代を気取ったわけではありません。休みの日にはいつも着ているエジプトの平服で、ガラベーターヤといえます。この日は十月の末としてはとても暖かく、汗ばむほどでした。

縄文農耕論

縄文農耕論が目で見えて分かるように展示されているという小林前館長の言葉を確かめるべく、鮎の



井戸尻遺跡の石器展

塩焼きとビール売り場の脇を断腸の思いで通り抜け、考古館に向かいました。「本日はお祭りのため入場無料」といわれ、とても得した気分です。

ここにはハヶ岳山ろくで発掘さ

れた二千点以上の土器や石器が、時代を追って展示されており、縄文オタクにとっては垂涎の場所なのです。

展示室は小学校の教室を一回り大きくしたぐらいの広さですが、壁に沿って一面に土器や石器が展示されています。展示は縄文草創期から晩期まで時代を追って順番に展示されており、一周すると土器様式の変遷が理解できるようになっています。

考古館には展示の内容を説明してくれるiPad（アイパッド）が用意されていました。展示棚に示された番号を押すと、そこにある展示物の解説が流れます。

展示物をすべて紹介してゆくと分厚い一冊の本になってしましますし、私の力量ではとてもできま



上段中央の石器は刃が斜めにすり減っている

せん。小林前館長さんから聞いた「縄文農耕論」を裏付ける展示を数点紹介したいともいます。まず左の写真の石器を見てください。これらが石鍬と呼ばれる石器です。堅穴式住居の穴を掘ったり、山野草の根を掘ったりするためにも使

ったでしょうが、それだけの使用目的ではあまりにもたくさん出てくる。こんなにとくさん出てくるのは、農耕に使ったのではないかというのが、藤森栄一の「縄文農耕論」の論拠の一つです。

小林公明さんらは、さらに石器の形に注目します。道具は長い使用経験の中で、使用目的に一番適した形になるはずだから、石器の形からその石器が何に使われたのかを推測できるといふ訳です。

例えば、先ほどトウモロコシの収穫で使った石包丁は、背のところが厚くて握りやすいようになっていきますし、反対の刃の部分が薄く、イネ科の植物を切るのに適した形をしています。

前ページの写真中央の石器を見てください。刃が斜めになってい



遠山郷

ますね。なぜこんな形になったのか考えていた時に、伊那の遠山郷の農具を見てひらめいたそうです。右の写真は日本のマチュピチュといわれる遠山郷の写真です。そして次の写真が考古館の資料にあった遠山郷で使われていた鍬です。石鍬と同じように片減りしている

ことが分かります。

私も百姓の子せがれですから、多少の農作業の経験があります。傾斜がある畑で鋤を使うときは、斜面の下の土を上には掻きあげるように使います。大切な土を流さないためです。

こうした場合、刃は斜めに打ちおろされ、長年使っている間に刃の先は斜めに減ってくるのです。遠山郷の鋤は鉄製ですが、石器の鋤にも同じようなことが起こったに違いありません。



刃が斜めにすり減っている鋤



「ある動作をするための道具は、材料が石であろうと鉄であろうと同じ形になる」という民俗学の視点がここでは生かされています。石がすり減るほど同じような動作が繰り返されたとすれば、農耕も一時的なものではなかったはずで、す。定住したうえで、集落の周囲に畑を開墾し、何年にもわたって作物を栽培した農耕文化の姿が浮かび上がってきます。

もちろん証拠はこれだけではありません。

土偶は、縄文農耕論を証明するものだと藤森は考えました。土偶は豊かな作物の再生を願う儀式に用いられた地母神だったと考えたのです。農耕社会であったがゆえに、土偶が作られる必然性があったとしたのです。

南アルプス市の鋳物師屋遺跡から出土した「ラヴィー」のように完全な姿で出土する土偶も稀にはありますが、ほとんどの土偶は手や足や首がもぎ取られ、ばらばらに壊された形で出土します。

神話学者・吉田敦彦は、環太平洋文化圏の農耕社会に分布する神話を紹介し、母なる大地の女神、地母神を殺害することにより、作物の再生を願う信仰が縄文時代に

もあったのではないかと推測して、藤森の縄文農耕論を支持しています。「昔話の考古学―山姥と縄文の女神」。

また井戸尻を代表する蛙文文様の土器についても、死と再生を象徴する文様で、農耕の存在を強く示唆します。

上の二つの土器とも井戸尻考古館に展示されているものですが、土器に付けられた奇妙な文様は蛙だと考えられています。

私の家の裏は田んぼですが、お田植えのころになると突然たくさんの蛙がゲコゲコとうるさいほどの声で鳴き始めます。それはまさしく地中から突然湧き出してきたようなにぎやかさです。

冬の間は一匹も姿を見せなかつ



蛙紋付き有孔罎付土器



たのに、何という素晴らしい、生命力、再生力かと縄文の人たちは考えたに違いありません。藤森はこれら有孔罎付土器を、種もみを貯蔵するための特別な土器と考えました。

つまり土偶の女神と土器の蛙はいずれも農耕の豊穰を祈る縄文人たちの信仰の反映だったのです。

植物遺物の発見

その後、長野県諏訪市荒神山の発掘で、縄文時代中期の遺跡からアワらしい炭化物がみつかったという報告もあります。

また三内丸山遺跡からは、栽培ヒエの祖先にあたる野生種のイヌビエが大量に発見されました。縄文前期から中期末にかけてヒエの種子が大型化することから栽培が

推測されます。

ヒエやアワは耐寒性が強く、瘦地にも適応します。戦前までは冷害に強いことから、全国の山間地で栽培されていました。

コメ作りをしている農家に聞いたことがあります。ヒエはいまだに生えて来て、これを抜くのがひと仕事だそうです。昔の種がいまだに生き延びて芽を出すのでしょう。縄文時代中期の気候はいまとそんなに変わらないと考えられていますから、ハヶ岳山麓で栽培されていた可能性は十分あります。

山梨県の縄文遺跡からも縄文中期の農耕を裏付ける証拠が出ています。県立考古博物館に行けば、明らかに栽培種と考えられる大豆の痕跡が出てきた土器が展示されています。



考古館の裏で栽培されていたシコクビ

ある学芸員が土器をいじっているときに、取っ手のあたりを誤って欠いてしまいました。欠けた断面に小さな空洞があったので、そこにシリコンを流し込み、何の痕か

確かめたところ、十ミリ程度の大豆が挟まっていたことが確認されました。野性のものはせいぜい五ミリ程度ということから、栽培種のものと考えられています。ケガの功名とはこのことです

しかし縄文農耕論が定説として認められている訳ではありません。縄文時代は狩猟・採集・漁労の時代だと考える研究者もたくさんいます。

井戸尻のすぐ近くの岡谷市の出身で藤森の弟子でもあった戸沢充則（明治大学前学長・考古学者）は、「栽培植物についても、長く続いた縄文社会の生産や経済基盤を変革させるようなものとはなり得なかった。縄文の栽培植物の問題と弥生時代の稲作農耕とは質的な違いがある」と言っています。

例えば、会社勤めをしながら家の裏の畑で野菜を作っている人を農民とは言わないでしょう。つまり栽培植物があることがすぐには農耕の証明にはならないというわけです。

栽培が縄文人の植物採集を補う程度の役割しか果たしていないのであれば農耕とはいえない、栽培必ずしも農耕ならずという訳です。縄文の土器や土偶に魅せられて「時間」への旅を始めたばかりですが、あちこちの遺跡や博物館を訪ねる度に縄文への思いは深まるばかりです。

fujizakura



井土尻考古館所蔵・葉書になった水煙渦巻文土器